

天仲寺古墳・広運寺古墳

(福岡県築上郡吉富町所在古墳の発掘調査)

吉富町文化財調査報告書

第 1 集

1983

吉富町教育委員会

序

吉富町には、古代文化を物語る幾多の遺跡が、町内の丘陵地帯を中心にして存在していましたが、年代の変遷と共に次第にその姿が失われて来ました。

天仲寺古墳は、現存する古墳が数少なくなった本町にとっては、貴重なものであり、又その規模等からみても価値ある古墳であります。町教育委員会は、この尊い文化遺産を保護し後世に伝えるため、昭和57年度事業として、国県の援助のもとに、天仲寺山の古墳の発掘調査を実施しました。この調査報告書は、その成果をまとめたものであります。

この調査報告書を、古代文化を探る資料として利用いただき、ひいては町民文化の向上に役立てていただくと共に、埋蔵文化財について一層の御理解と御協力を願うものであります。

この度の発掘調査にあたり、御指導、御援助をたまわりました福岡県教育庁文化課、並びに御協力をくださいました地元関係者の方々に、衷心より感謝いたします。

昭和 58 年 3 月

吉富町教育委員会

教育長 高原 洋

例 言

1. 本書は、昭和57年度に国・県の補助事業として吉富町が実施した緊急発掘調査内容の報告である。
2. 発掘調査は福岡県文化課の酒井仁夫と伊崎俊秋が担当した。
3. 遺物整理は福岡県立九州歴史資料館において岩瀬正信氏の指導の下に実施し、酒井と伊崎が実測した。
4. 掲載した遺物写真は九州歴史資料館の石丸洋氏が撮影した。
5. 挿図の浄書は豊福弥生氏が行った。
6. 本書は酒井が編集した。

本文目次

I 調査の経過	1
II 位置と環境	3
III 調査の内容	6
1. 天仲寺古墳	7
2. 広運寺古墳	14
IV 結 語	19

図版目次

図版 1	1) 天仲寺古墳遠景
	2) 天仲寺古墳と広運寺古墳遠景
2	1) 天仲寺古墳々丘(西より)
	2) 天仲寺古墳々丘(北より)
3	1) 天仲寺古墳第1トレンチ土層と天井石
	2) 天仲寺古墳第3トレンチ土層と天井石

- 4 1) 天仲寺古墳第2トレンチ西端の外濠と天井石
2) 天仲寺古墳石室(前庭部より)
- 5 1) 天仲寺古墳玄室奥壁
2) 天仲寺古墳玄室より前室・羨道部を臨む
- 6 天仲寺古墳出土須恵器・地輪
- 7 1) 広運寺古墳全景
2) 広運寺古墳石室全景
- 8 広運寺古墳出土須恵器①
- 9 広運寺古墳出土須恵器②

挿 図 目 次

第 1 図	周辺遺跡分布地図 (1/25,000).....	2
第 2 図	黒部山古墳出土刀装具実測図 (1/3).....	3
第 3 図	楡生山古墳出土武器実測図 (1/3).....	4
第 4 図	天仲寺古墳地形実測図 (1/200).....	6
第 5 図	天仲寺古墳第1トレンチ土層断面図 (1/60).....	7
第 6 図	天仲寺古墳第2トレンチ土層断面図 (1/60).....	8
第 7 図	天仲寺古墳第3トレンチ土層断面図 (1/60).....	9
第 8 図	天仲寺古墳推定復元墳丘平面及び断面図 (1/60).....	10
第 9 図	天仲寺古墳石室実測図 (1/60).....	折込み
第 10 図	鈴・留金具実測図 (2/3).....	11
第 11 図	天仲寺古墳出土須恵器及び地輪実測図 (1/3).....	12
第 12 図	広運寺古墳地形実測図 (1/200).....	14
第 13 図	広運寺古墳石室実測図 (1/60).....	15
第 14 図	広運寺古墳出土須恵器実測図① (1/3).....	17
第 15 図	広運寺古墳出土須恵器実測図② (1/3).....	18

I 調査の経過

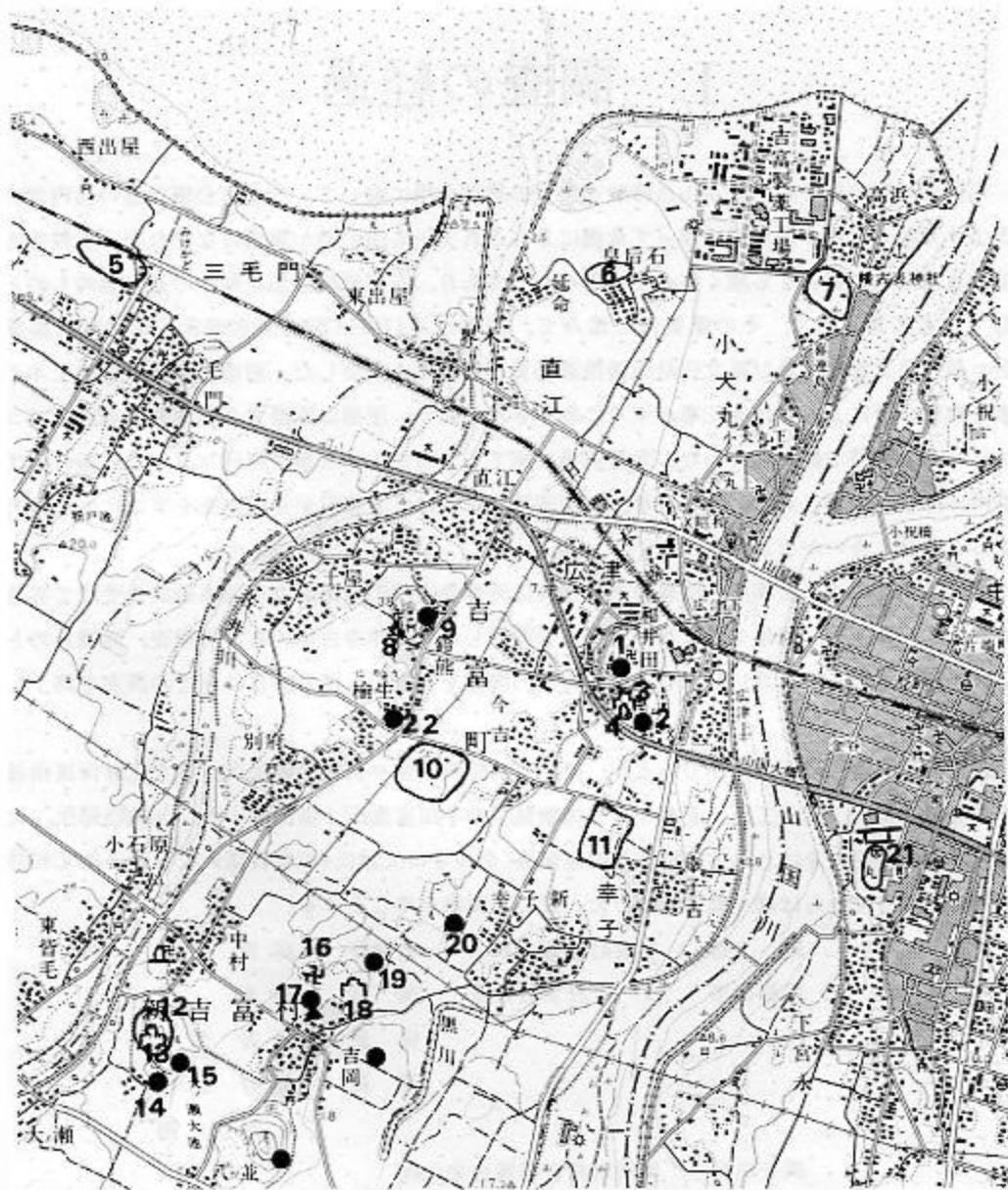
昭和56年秋の第2回西日本山岳修験道学会の懇親会場において、吉富町公報担当の宮内澄夫氏より天仲寺古墳が崖崩壊に伴って危機にさらされている由の話が筆者になされた。天仲寺古墳は吉富町内に残存する極く僅かな古墳の一つであり、石室規模は築上郡中で最大級のものとして著名であるので、その重要性に鑑みて、同年11月17日に現地で宮内氏、町文化財協議会々長守口文雄氏、及び県文化財保護指導委員宮本工氏と立会した。崩壊崖面は県豊前土木工事々務所の手によって保護工事がすでに着手されており、崖面に露呈する古墳石材周辺までコンクリート擁壁で被われていた。急速現場に来てもらった土木工事々務所々員とも協議し、工事の一部設計変更と共に、昭和57年度に国庫補助を受けて吉富町が発掘調査を実施すべく努力するとの話し合いがなされた。

昭和58年度に吉富公園内の広運寺古墳と共に天仲寺古墳の発掘調査が国庫補助を受けて実施することが確定し、同年5月6日から調査を開始した。天仲寺古墳の石室内調査、同墳丘のトレンチ調査を経て、5月19日から広運寺古墳の調査を実施し、同月29日に全ての調査を終了した。

調査の関係者は以下の通りであるが、県立求菩提資料館々長重松敏美氏、県文化財保護指導委員浜嶋三司氏、宮本工氏、北九州市立博物館主幹小田富雄氏、磯田澄子氏、矢頭睦郎氏、矢頭三郎氏の各先生をはじめ吉富町文化財協議会(会長守口文雄氏)の会員諸氏ならびに地元和井田の会員の方々からは種々助言を受けた。記して謝意を申し上げる。

総括	吉富町教育委員会	教育長	高原	洋
庶務担当	社会教育課	課長	是木	光
		係長	別府	春男
		係員	永野	公敏
			上西	裕
調査担当	福岡県教育委員会文化課	主任技師	酒井	仁夫
		同 技師	伊崎	俊秋

なお、天仲寺古墳は県豊前土木事務所の協力によって現地保存されることとなった。長く郷土の文化遺産として町民及び歴史を学ぼうとする人々に実資料として活用されることを願っている。



- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 広運寺古墳 | 2. 天仲寺古墳 | 3. 天仲寺山城跡 | 4. 小笠原長次の墓 |
| 5. 三毛門遺跡 | 6. 皇后石遺跡 | 7. 古表神社 | 8. 鈴熊山石塔群 |
| 9. 鈴熊山古墳 | 10. 今吉遺跡 | 11. 矢頭田遺跡 | 12. 雄熊山古墳群 |
| 13. 日熊城跡 | 14. 日限2号墳 | 15. 日限1号墳 | 16. 伝福伝寺跡 |
| 17. 巨石塚古墳 | 18. 吉岡城跡 | 19. 大塚古墳 | 20. 塚木古墓 |
| 21. 高畑遺跡 | 22. 楡生山古墳 | | |

第1図 周辺遺跡分布地図(1/25,000)

II 位置と環境

天仲寺古墳及び広運寺古墳は周防灘に注ぐ山国川河口西岸に位置する。耶馬溪溶岩台地を開析した山国川は河口に中津沖積平野を形成するが、耶馬溪台地の一脈である松尾山系は山国川西岸にそって伸び、北行の段丘を形成している。山麓には群集墳・横穴墓群・瓦窯跡（国指定友枝瓦窯跡）が営まれている。佐井川と山国川に挟まれた中位段丘上には中桑野弥生時代遺跡や巨石塚前方後円墳、竪穴式石室を主体とする楡生山古墳を含めた古墳群、さらには垂水の奈良時代寺院跡や楡生経塚遺跡そして室町時代の吉岡備前守の居城といわれる吉岡山城や天仲寺山城が営まれ時代の流れを連綿と今日に伝えている。段丘北端に位置する天仲寺山頂には中津藩主初代小笠原長次以下3代までの石塔が建立されている。

山国川河口の旧島と思われる小犬丸（広津崎）の八幡古表神社は縁起によれば、養老3年に宇佐神軍と供に隼人軍城を囲み落した後、天平16年の宇佐宮放生会に際して「隼人降伏の時、戦場に伎楽を奏す。今また、古を表す木像を彫りて、その舞を……」との豊前国司の令によって始められた傀儡子舞が今日でも4年に1度奏されている。宇佐八幡神と築上郡（上三毛郡）との縁（えにし）を伝えるものとして注目される。古墳時代においても宇佐勢力との係り合いが当地域では深かったと推測される。

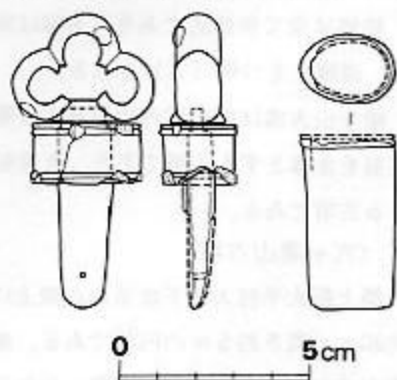
当地域の古墳時代は、北西部の京都・行橋地域と東部の宇佐の二大勢力にはさまれ、苅田町石塚山古墳や宇佐市赤塚古墳のような前期古墳は存在せず、後期の大古墳も存しないといわれてきている。例え大勢力の中核地ではないにしても当地域の古墳や横穴は近年の発掘調査結果をも含めて注目すべき諸点の内容を垣間見させる。

以下、吉富町誌・築上郡誌の著者であり、秀れた郷土史家であった故岡為造氏の旧蔵品一部の紹介をも兼ねて、当地域の若干の古墳の内容を記してみたい。

〈黒部古墳群〉

豊前市松江の周防灘に接した丘陵上に営まれた6世紀から7世紀にかけての古墳群である。

昭和52年に調査された6基の古墳のうち5号墳の主体部である横穴式石室の玄室側壁及び玄門壁には線刻で大型構造船及び舟が刻まれている。船はゴンドラ型で数槽あり、帆・櫂・舵・櫓、甲板上構造物が明らかである。なお当古墳を含む3基の古墳は昭和54年に県



第2図 黒部山古墳出土刀装具
実測図（1/3）

指定史跡となった。

岡氏資料中に大正11年11月1日、角田村松江黒部山古墳発見の銅製三累環頭把頭と同一大刀に属すると思われる鞘尻がある(第2図)。環頭の3環は断面半円形であり、平面形は正円である。各環径は頂部のそれが1.8cmであり、側環より僅かに大きい。銅製の把口金物は環頭と別造りであり、鉄製茎がその頂部を貫通し、幅厚とも薄くなって環頭基部に挿入されている。茎下部には目釘孔が穿たれている。環頭的全幅は3.1cm、厚さ1.2cmであり、把縁金物の全幅は3.8cm、厚さ2.0cmである。銅製鞘尻は端部を欠損するが、把縁金物と同様の二段凸帯を有すと思われ、底面は平坦である。推定長は4.6cm、最大幅は2.5cmである。三累環式環頭と同一大刀の鞘尻が共に発見された例は極めて少なく、当式環頭はこの黒部山古墳出土品が唯一である。

なお、岡氏のいわれる黒部山古墳は昭和52年調査の古墳か、少なくともそれらを含むグループ中の古墳石室内から出土したものであろう。

〈楡生山古墳〉

吉富町大字楡生の丘陵上に独立して営まれた円墳である。現在、民家と公民館のために裾部を削られているが、墳丘上で埴輪が採集される。

昭和2年に発掘され、6枚の天井石をもつ竪穴式石室中から直刀3振と鉄鉾・鉄鎌が発見された。岡氏資料中にはこのうち鉄鉾と鉄鎌5本が含まれている(第3図)。

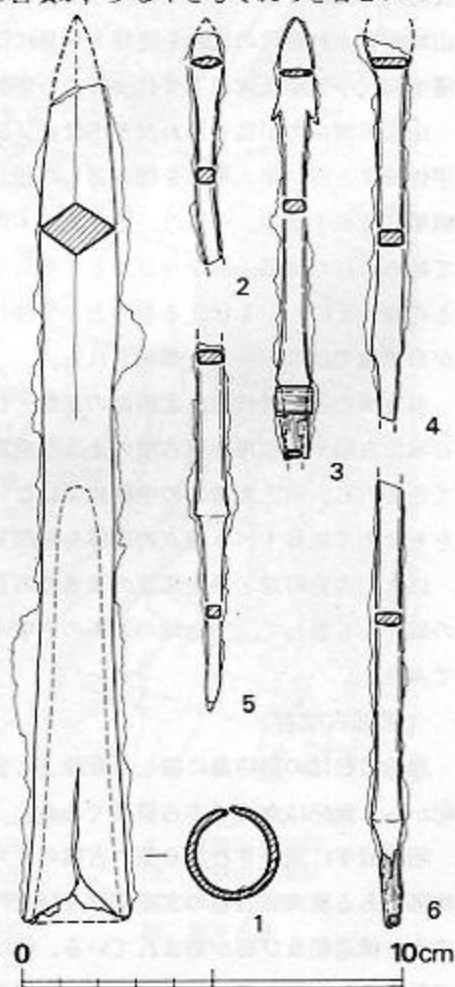
鉄鉾は先端部を欠失しているが略完形品である。刃部は断面肉厚の菱形をなし、幅は袋上端部より僅かに狭む程度である。推定全長23.9cm・袋部下端径2.8・刃部最大幅2.0cm。

鉄鎌は全て依根式であり、刃部は両丸造りである。逆棘をもつ例(3)もある。

楡生山古墳は築上郡内で現存する唯一の竪穴式石室を主体とする古墳であり、5世紀代に遡らせる古墳である。

〈穴ヶ葉山古墳〉

築上郡大平村大字下唐原の丘陵上に位置する径約20m・高さ約5mの円墳である。南に開口する横穴式石室玄室の奥壁・側壁・天井石とも一枚岩の巨石で構築されている。玄室の法量は奥行3.4m



第3図
楡生山古墳出土武器実測図(1/2)

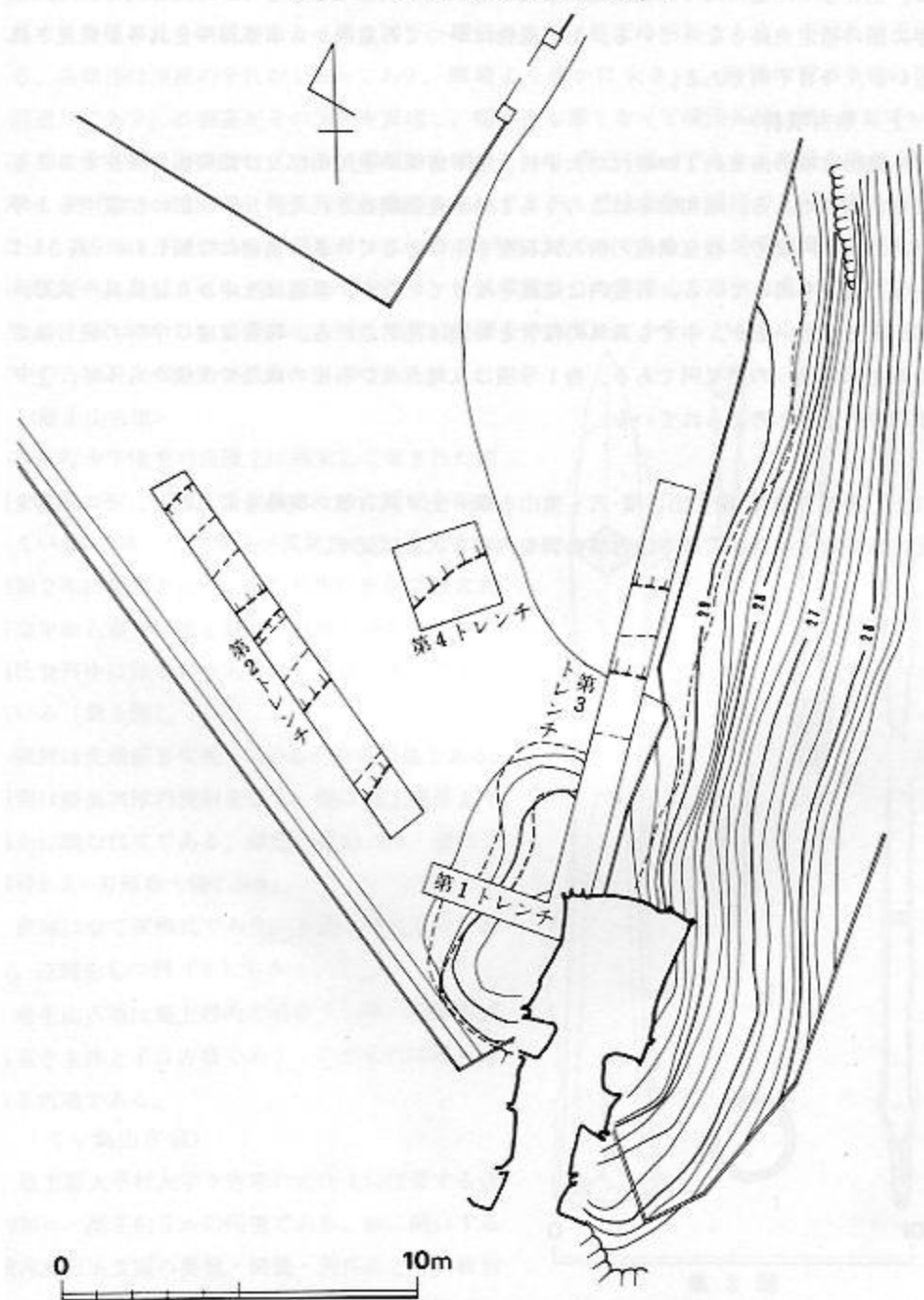
・幅約2.4m・高さ2.2mであり、羨道は長さ約6m・幅1.5m・高さ1.8mを測る立派な石室である。主として羨道の向って左側壁に木葉や鳥・魚・武器らしきものが線刻されており、昭和14年に国の指定史跡となっている。出土遺物はかつて石室内から須恵器や金具等が発見されたらしいが、今日不明である。

〈上ノ熊古墳群〉

穴ヶ葉山古墳の南東約1km離れた大平村大字下唐原の上陵頂部及び傾斜面に所在する7基よりなる古墳群である。昭和52年にこのうち2基が発掘調査された。丘陵頂部に位置する1号墳は径約18mの円墳で、複室構造の横穴式石室を主体としている。奥壁には幅1.8m・高さ1.7mの巨大な鏡石を用いている。石室内は盗掘を受けていたが、墓道埋土中からは馬具や武器、須恵器が出土しているが、中でも馬具の鞍骨と輪鑑は注目される。鞍骨は逆U字形の完形品であり、築上郡内唯一の発見例である。当1号墳は立地点及び石室の構造や規模からみて、上ノ熊古墳群中の主墳と考えられている。

以上、黒部古墳群・楡生山古墳・穴ヶ葉山古墳・上ノ熊古墳の概略を記したが、その内容をふまえて天仲寺古墳及び広運寺山古墳の調査内容を次章に記す。

III 調査の内容



第4図 天仲寺古墳地形実測図(1/200)

1. 天仲寺古墳

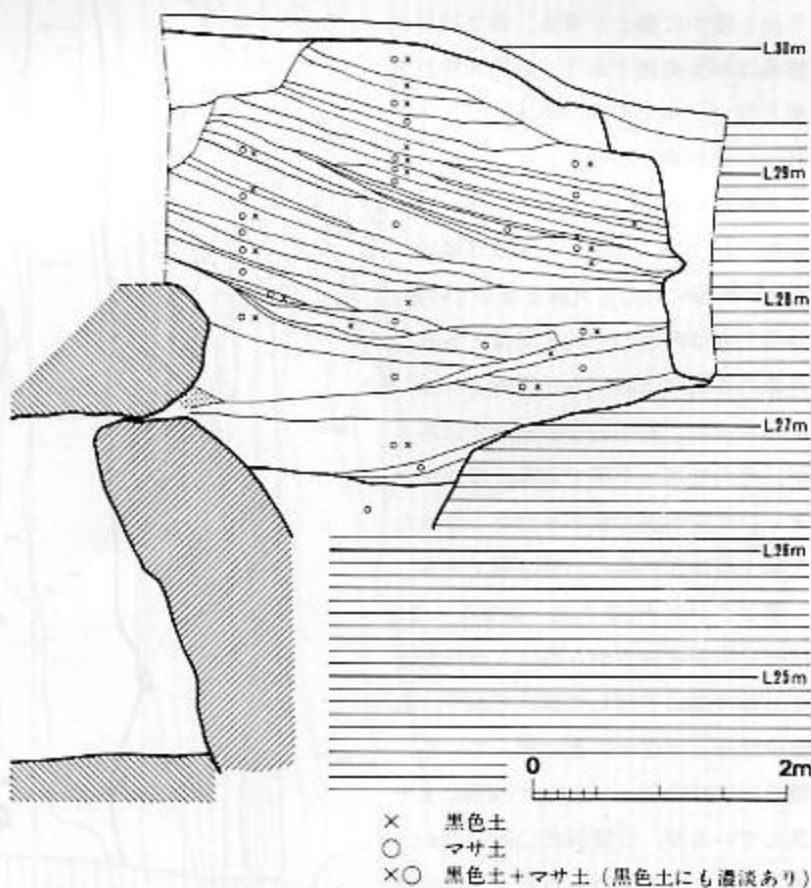
a. 立地 (図版1)

標高30.30mを最高所とする天仲寺山は山国川河口西岸に臨み、中津平野及び周防灘を睥睨するに最も適した状況下にある。この丘陵上に中世山城が築かれ、また中津藩主の初代小笠原長次以下3代までの墓所が設けられたのも軍事的な拠点としてこの天仲寺山が見られていたことを物語っている。この丘陵の東南端に天仲寺古墳は占拠している。なお西側にはかつて少なくとも2基の古墳があったようであり、埴輪片が採集されている。

丘陵中腹に建立されている天仲寺は大友軍の戦火によって天正年間に焼失し、寺宝もまったく残していないが、現在では臨濟宗を奉じている。

b. 墳丘 (第4～7図, 図版2・3・4-1)

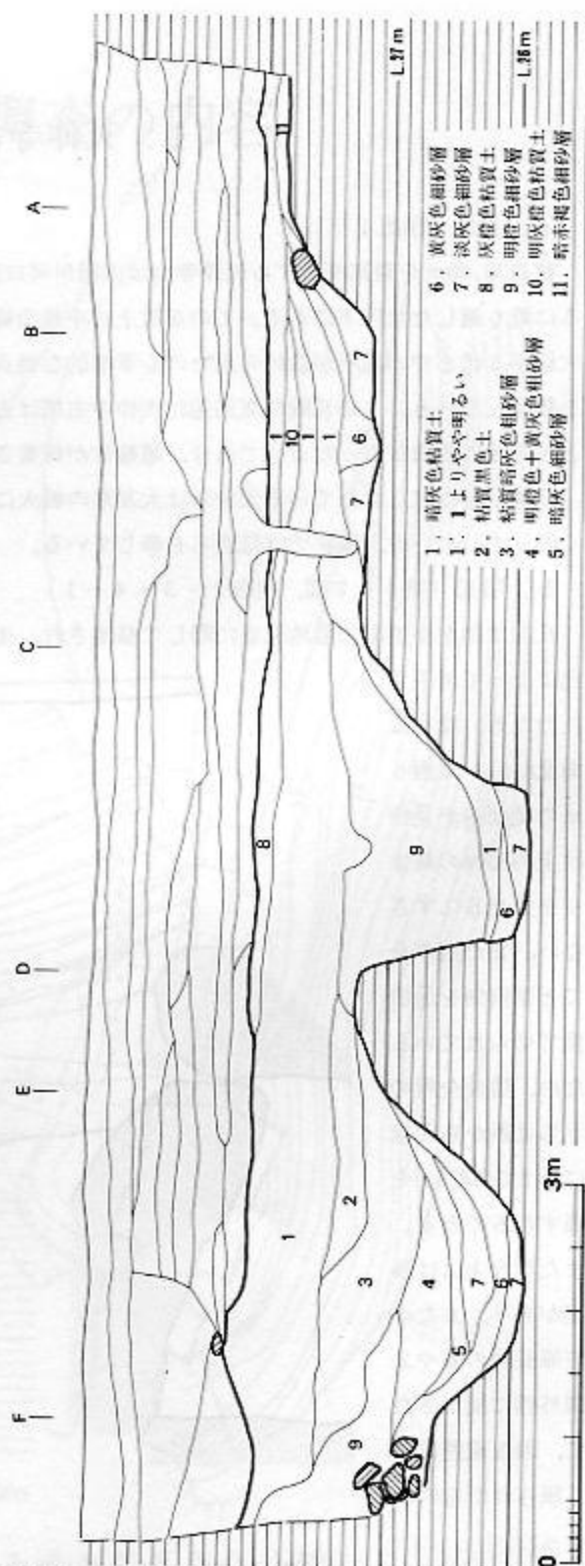
丘陵頂部が小笠原公墓地建立に際して整地され、また近年の配水池造成やそれに伴う公園化によって削平されたため、墳丘は南北8.5m・東西6mの範囲内が見掛け上約80cmの高まりを見せるにすぎない。また西半全てと東南側を崖法面で切られているため、墳丘全周のうち北西から北東にかけての約1/8を残すのみである。また墳丘上には藤棚があり、また小笠原長次の墓や公園外柵に制約されて、調査範囲は極く限られたものとなった。



第5図 天仲寺古墳第1トレンチ土層断面図 (1/60)

僅かに残された墳丘上に設けた4本のトレンチ調査の結果二重の周溝をもった3段築成の円墳と推定された。第1トレンチ(第5図・図版3-1)は石室東側壁に直交して設けたトレンチであり、天井石上に約1.8mにわたる細かい版築による盛土が観察され、掘り方肩部から石室床面までの深さは2.5mであった。第1トレンチ西端の墳丘裾部は攪乱を受けているが、第2トレンチ(第6図)の所見と考え合わせると、両トレンチ間が墳丘の第2及び第3段目の境になると考えられる。地山を削り出し僅かに盛土が乗る。第2段目の標高は28m前後であり、石室天井石上面と同レベルである。第2トレンチのB-C間が第1段目であり、幅は2.5mである。C-D間は内濠で上幅2.5m・底幅1.2mである。E-F間は外濠で、断面は内濠に比して丸味を帯びている。外濠上幅は内濠のそれと同様である。外濠の外側には石積み(図版4-1)がみられた。意図的な石積みではあるが、その性格は不明である。なお第2トレンチ実測図で数字を付さなかった上部上層は江戸時代の整地層である。

第3トレンチ(第7図、図版3-2)は石室実測中央点から西に1m移動させ公園外柵に平行して設けており、石室中軸線より僅かに東に振っている。墳丘は玄室中央から9.9mの位置にまで及んでいるが、丘陵斜面に近いので、第2トレンチで認められたような段築

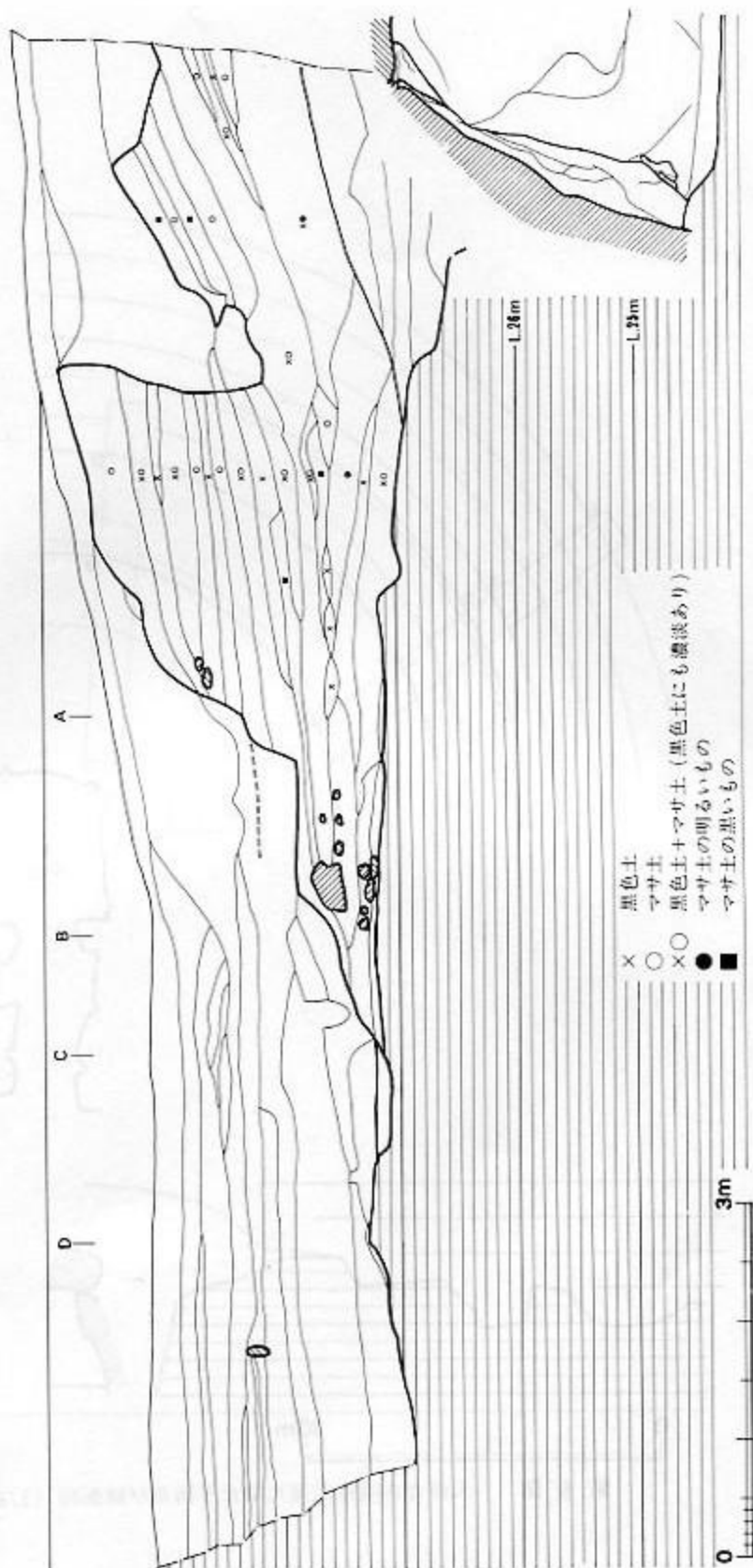


第6図 天仲寺古墳第2トレンチ土層断面図(1/60)

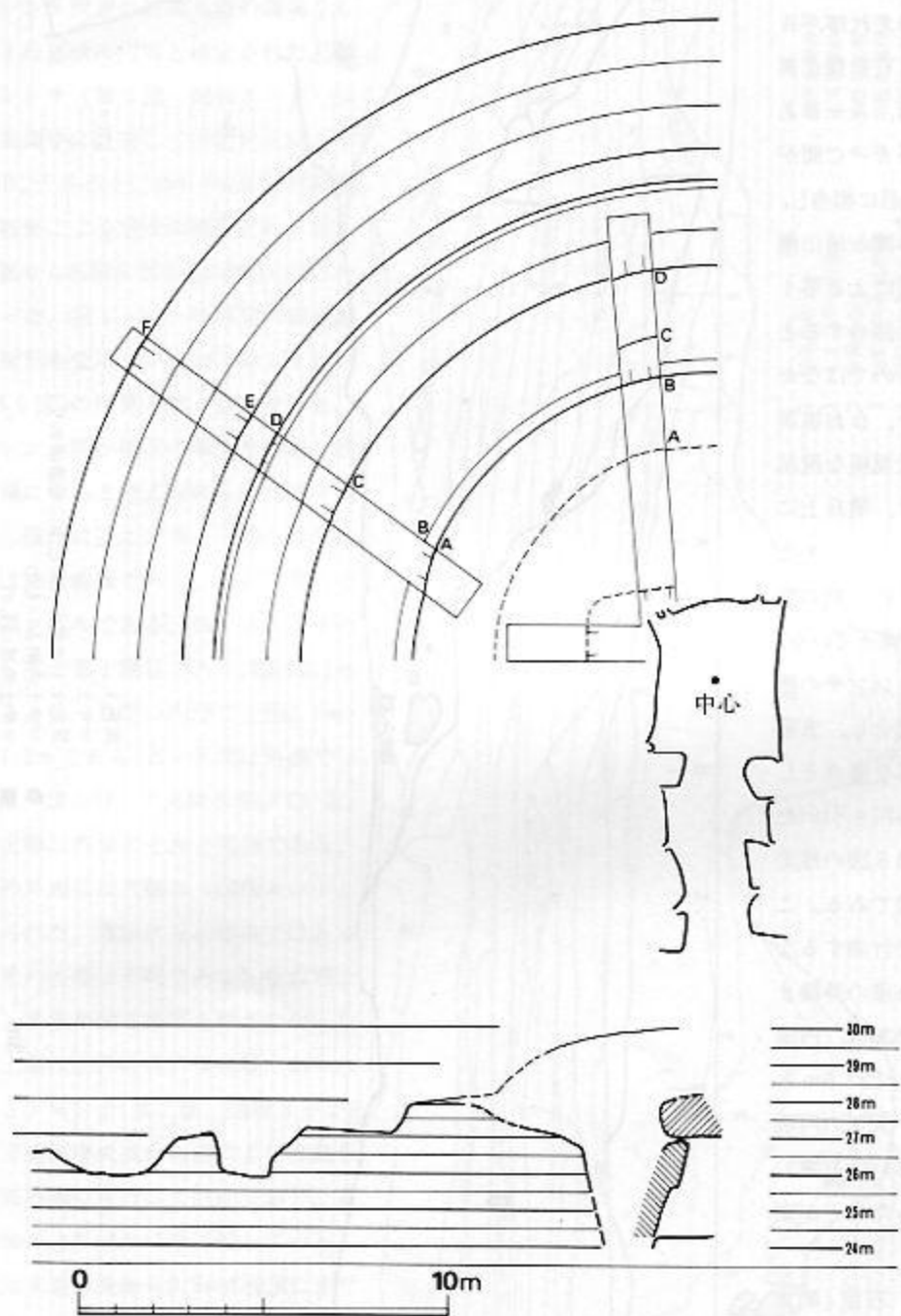
は崩れていた。強
いて考えれば、A
点より石室側が第
3段目、A-Bあ
るいはA-C間が
第2段目に相当し、
C-D間が地山削
り出しによる第1
段目に該当すると
言えるのではなか
ろうか。なお墳頂
部は大規模な攪乱
を受け、墳丘上には
第2トレンチと同様に江戸期の整
地層が乗っている。

各トレンチの所
見を総合し、玄室
中央部を基点とし
て同心円を引いた
のが第8図の推定
復元図である。こ
の図で計測するな
らば外濠の外縁ま
で直径36m、内濠
内縁まで22.5mと
なり、大型の円墳
（あるいは方墳）
であったことが窺
える。

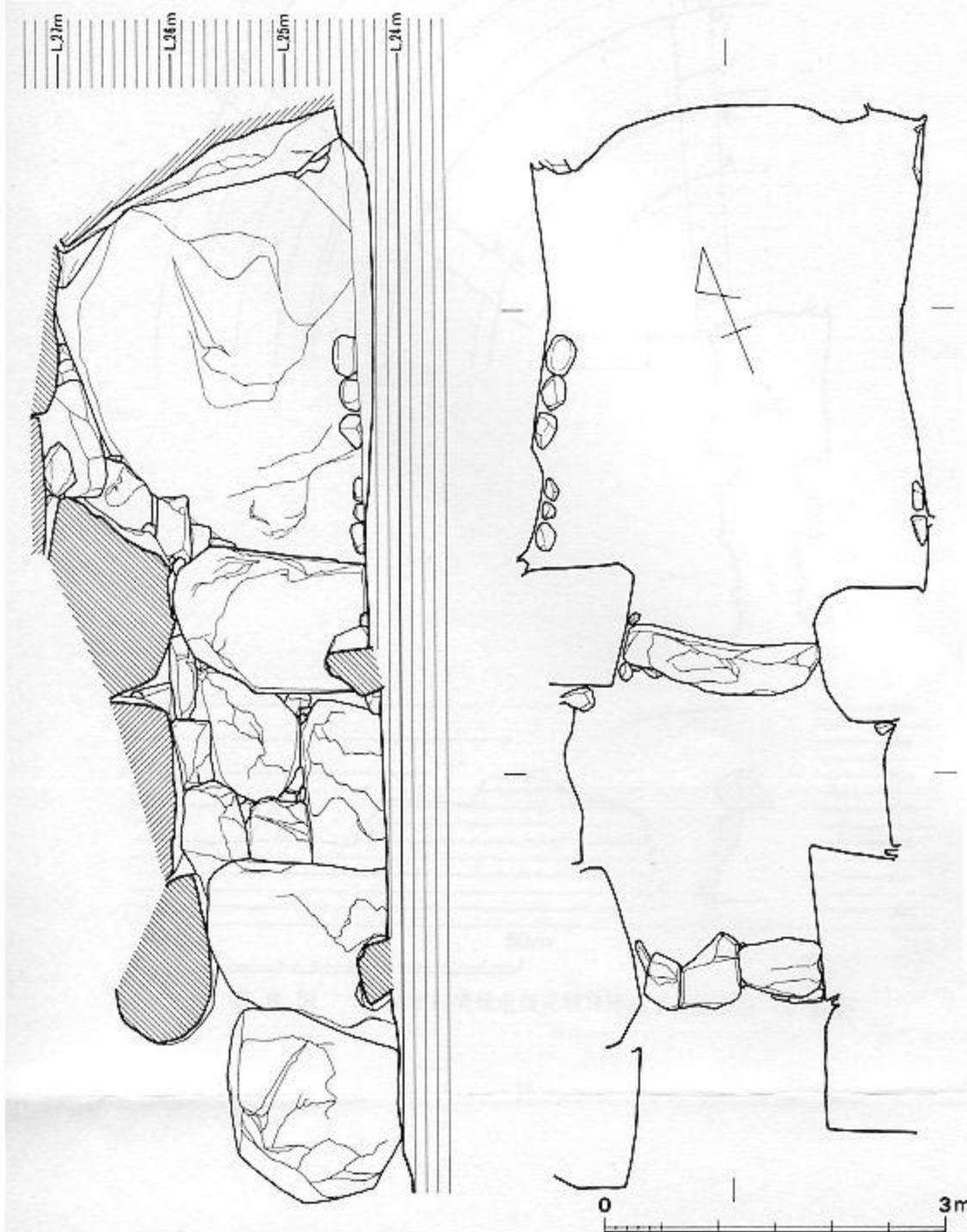
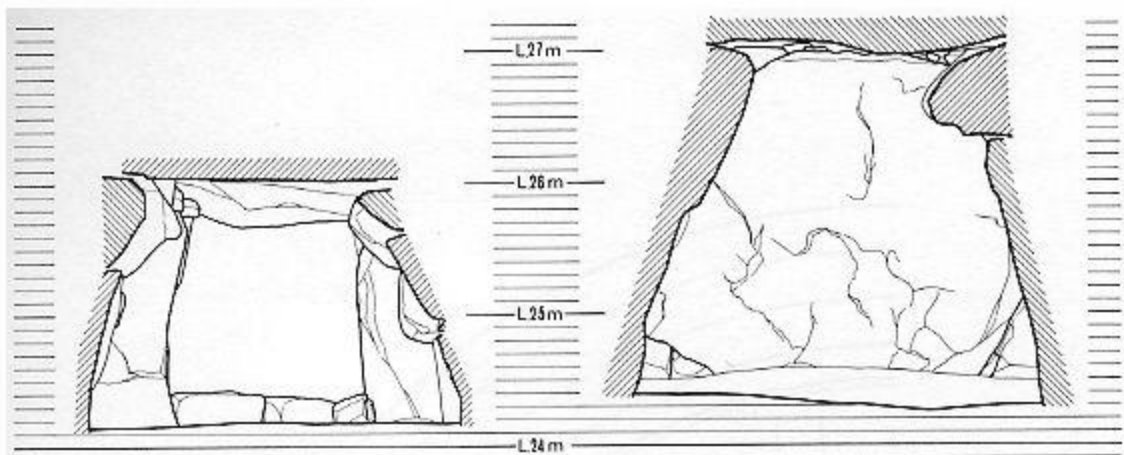
c. 石室(第9
図、図版4-2・5)
略南に開口する



第7図 天仲寺古墳第3トレンチ土層断面図(1/60)



第 8 圖 天仲寺古墳推定復元墳丘平面及び断面図 (1/200)



第 9 図 天仲寺古墳石室実測図 (1/60)

複室の横穴式石室であり、巨石墳である。

石室内は激しい盗掘を受けており、床面は周縁部を除いて深い窪みが掘り込まれて凹凸が著しい。また各壁や天井は完存してはいるが油煙で真黒に汚れていた。羨道から前室にかけては土砂が充満していたが、この土砂も閉塞石を取り除かれた後のものである。

玄室の各壁は巨大な花崗岩1枚を用いて構成されており、天井石との間に小石材を詰め石として用いているにすぎない。床面には本来は枕状石を敷いていたと思われる。奥行きは4.1m、幅3.2m、高さ2.6mである。玄門部幅は1.6mであり、高さは前室のそれと水平で1.8mである。前室の側壁には玄室石材と比べて極端に小振りの石材を用いており、西側で3段、東側2段積んで天井に至っている。床面の幅は2.7m、奥行きは0.6~0.8mである。床上には敷石が施されていたと考えられる。羨道の西側壁は各2個の用材で構築され、奥側にのみ天井が架構されている。床の仕切り石の位置とも考え合わせて、閉塞石は2用石間に積まれ、天井は旧来の姿を留めているものと思われる。羨道の手前には前庭が広がり、墓道掘り込みは崖に削られ確認されなかった。

石室の全長は9.7mである。各部の計測値を前章で記した大平村穴ヶ葉山古墳のそれと比較すると下記の通りであり、天仲寺古墳が復していることが明白である。

	全長	玄室			前室			羨道		
		奥行	幅	高	奥行	幅	高	長	幅	高
穴ヶ葉山古墳	9.5	3.4	2.4	2.2	—	—	—	6.0	1.5	1.8
天仲寺古墳	9.7	4.1	3.2	2.6	0.6~0.8	2.7	1.8	2.9	1.6	1.6

d. 出土遺物

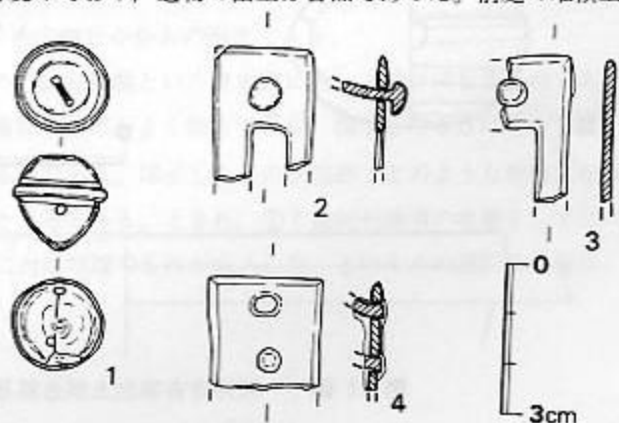
出土状況

石室内は甚しい盗掘によって攪乱を受けており、遺物の出土は皆無であった。前庭の堆積土中から銅鈴3個・馬具と須恵器片が若干出土した。

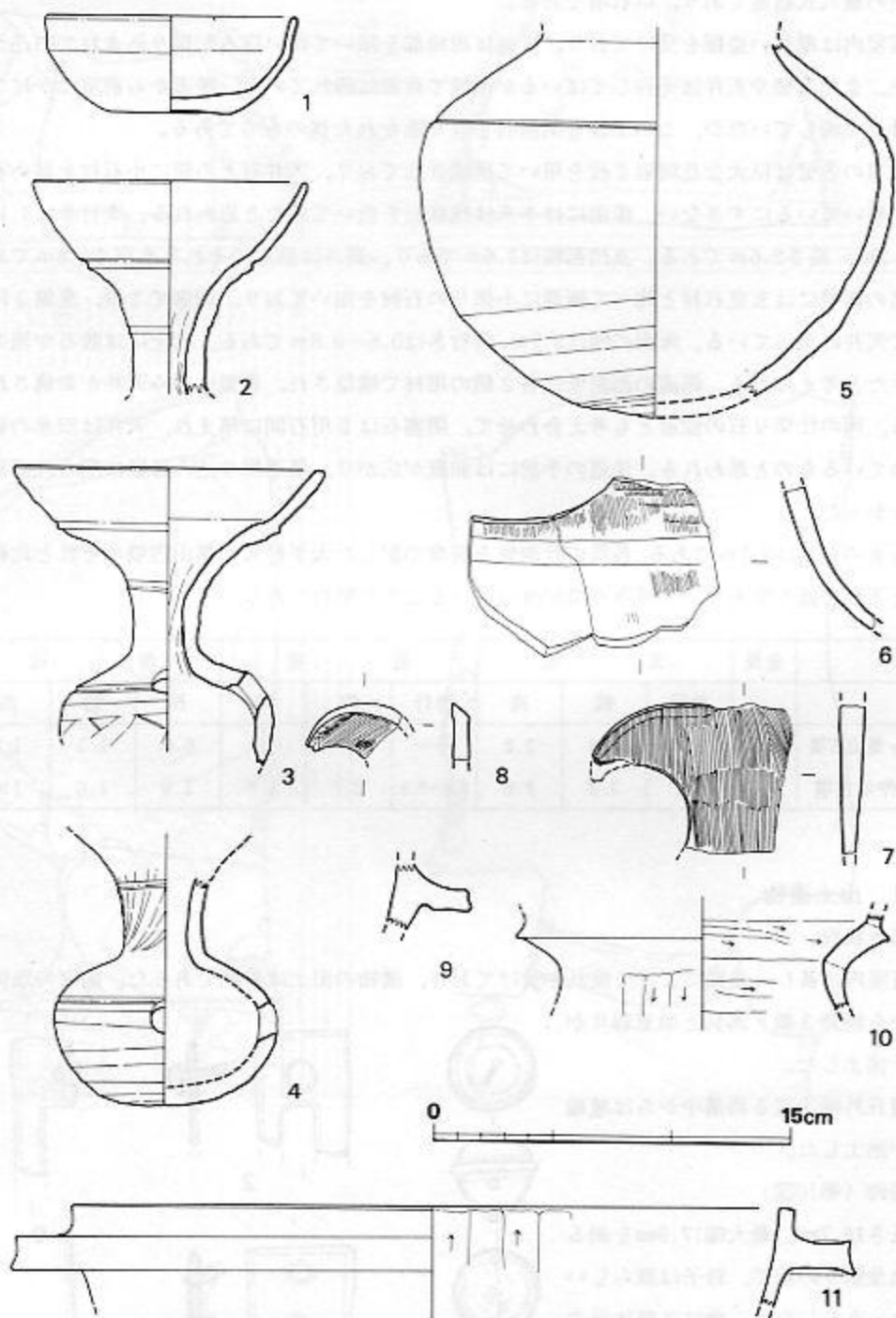
墳丘外縁を巡る周溝中からは埴輪片が出土した。

銅鈴 (第10図)

長さ18.7mm、最大幅17.9mmを測る銅地金張りの鈴で、鈴子は鉄らしいがはっきりしない。他に2個体分の破片があり、瑤瑠に供されたと思われる。



第10図 鈴・留金具実測図 (2/3)



第 11 図 天仲寺古墳出土須恵器及び埴輪実測図 (1/3)

留金具（2～4）

3点とも鉄地金張りで鉄をもつ。4の上幅が23mmを測る。

須恵器（第11図、図版6）

杯身1点、匙3点、壺1点がある。杯身（1）は底部が切り離しのまま未調整であるが平坦である。口径10.4cm・器高4.1cm。匙（2～4）は3点同類で、いずれも硬く焼き締まっている。3の球体部下位は静止ヘラ削りで調整している。2の口径は11.5cm、3は13.2cmである。壺（5）はやや軟質である。胎土中に砂粒が多く、体下部から底部にかけての粗いヘラ削りにより砂粒が甚しく移動している。最大胴部径20.0cm。

埴輪（第11図、図版6）

図示した6点の資料は埴輪と断定うるものではないが、出土状態が周溝内および墳丘上からということで、他の種類の土器とする積極的根拠もないゆえ埴輪として扱っておく。

6点とも全て丹塗りの痕跡をとどめ、ことに7・8・10はよく丹が残っている。色調は黄褐色～赤褐色で、胎土中に微砂粒を含むもきわめて精選された良質の粘土を用いている。

6は脚台の裾に近い部分かと思われる。外面は上方へ向かう縦刷毛目のあと横なでを施す。透し（あるいは切り込み）は円形にはならないようだ。内面はなでらしいが磨滅してよくわからない。7の外面は細かい刷毛目が著しい。内面は横方向のなでか削りらしいがはっきりしない。8は7と同様な形状を示すものであるが、刷毛目の方向と、上面の大きなカーブする面の傾斜が異なる。内面は削り。9はあるいは上下逆の形態なのかも知れない。突帯の突出度がきわめて大きく、下端の器体との接合面には凹みをもたせる。内面は磨滅著しく調整不明。外面は横なで。10は二重口縁の壺形の器形になるものであろうか。内面は横方向の削り、外面は頸のくびれ部以下が縦の削りで他は横なでを施す。口縁屈曲部の復原径15.6cm。

11は器台かと思われる円筒形の口縁部で、口縁下1～2.5cmの所に突出の著しい突帯（2.5cm）を貼りつける。突帯の先端は横なでのために肥厚した状態で中凹みとなる。復元口径30.2cm。外面は横なで、内面は縦方向の削りを施す。

6・10は周溝内から、他は第3トレンチの墳丘中からの出土である。

以上の6点の埴輪は、果たしてこの7世紀初頭という終末期に近い古墳に伴うものであろうか。埴輪そのものがどの時期まで残存するのかよく知らないが、図示した6点については、かえって古かるべき様相を強く認めるのである。図示したものが完形でどのような形態になるのかははっきりしえず、判断に苦しむところである。とまれ、①7世紀初頭頃の埴輪としてこのようなものがある。②古墳築造の際に古い時期のものが混入した。という点の選択枝を提示して諸賢の御教示を乞いたい。

2 広運寺古墳

a. 立地

天仲寺古墳の乗る丘陵の西側に浅い谷のくびれ部を隔てた丘陵西斜面に位置している。この丘陵は現在「吉富公園」として整備され、春の桜見や、北から東にかけて広がる周防灘の鳥瞰で賑わっている。公園の南西端に古墳が立地しており、周辺最高所の標高は25.8mである。

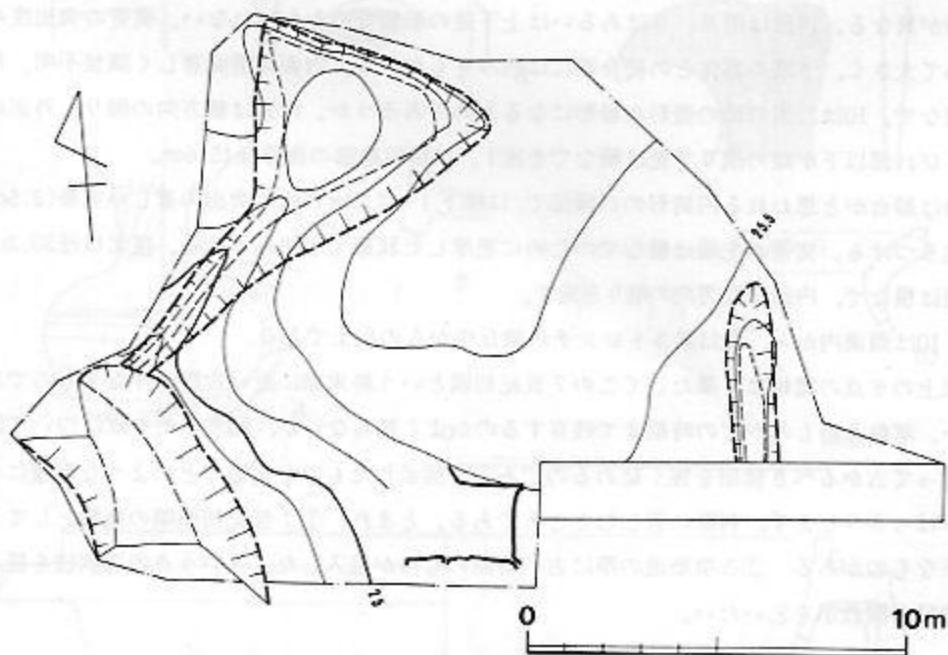
b. 墳丘（第11図）

墳丘は崩れさって、まったく残していないが、地山を掘り込んだ溝の範囲から径（あるいは一辺）12~13m程度の円（方）墳であったと考えられる。なお、西側の羨道入口方向（玄室奥壁より6.8m）には後世（中世山域と関連する遺構か？）の溝が掘られていた。現地表からの深さは約2mである。

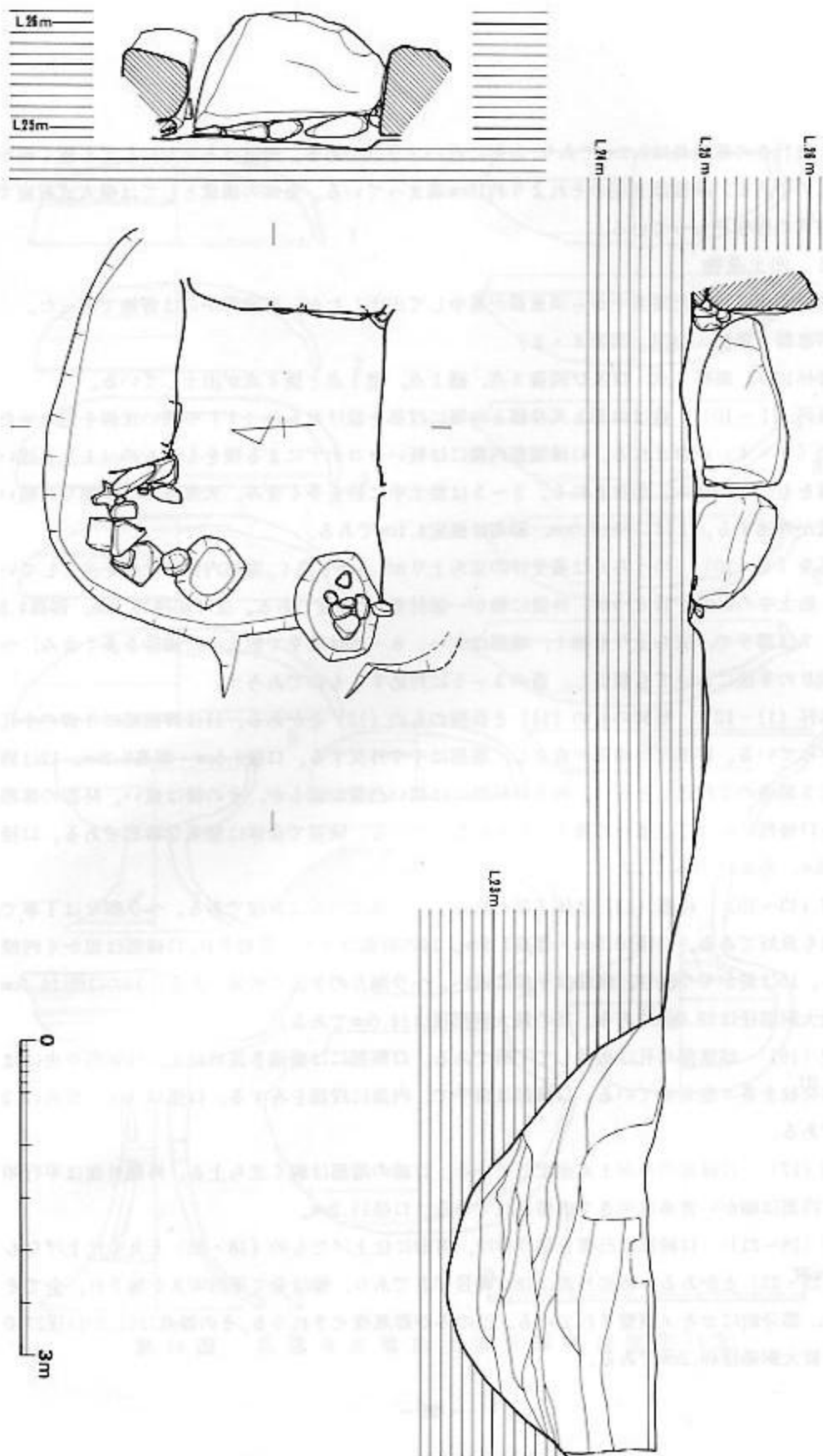
c. 石室（第12図、図版7）

玄室の腰石を僅かに残すのみである。その頂部は調査前から露出しており、内部には公園や周辺民家のゴミが厚く集積されていた。

石室は西に開口する単室の横穴式石室であり、奥壁1、西側壁各2個の腰石を用いている。但し、西側壁の手前側石材と両玄門石材は根石あるいは掘り方を残すのみである。玄室の幅は1.9



第12図 広運寺古墳地形実測図(1/200)



第13図 広運寺古墳石室実測図(1/60)

m・奥行きは推定長は2.2mであり、方形に近いプランである。羨道はあったにしても極く短いものである、床面は玄室のそれより約10cm高まっている。全体の構成としては横穴式石室でも古式の様相をもっている。

d. 出土遺物

奥壁裏側に設けた周溝中から須恵器が集中して出土したが、石室内からは皆無であった。

須恵器（第13・14図、図版8・9）

蓋杯10点、高杯2点、埴及び同蓋3点、甕1点、壺1点と甕4点が出土している。

蓋杯（1～10） 蓋は体部と天井部との境に段部を設けたもの（1）や浅い沈線を巡らせたもの（3・4）が含まれる。口縁端部内側には軽いヨコナデによる稜をもつもの（1）と浅い沈線をもつもの（3）が含まれる。3～5は胎土中に砂を多く含み、天井部のへら削りの粗い手法が共通する。1は口径14.0cm、器高は推定4.1cmである。

杯身（6～10）のうち6は蓋受けの立ち上りが1.4cmと高く、端部内側に沈線を巡らしている。胎土中の砂粒が目立つが、外壁に釉が一部附着し、硬質である。受け部径15.7cm、器高4.5cm。7は薄手で、立ち上りも細く、端部は丸い。8～10は厚手で胎土中に細砂を多く含み、へら削りの手法においても類似し、蓋の3～5に対応するものであろう。

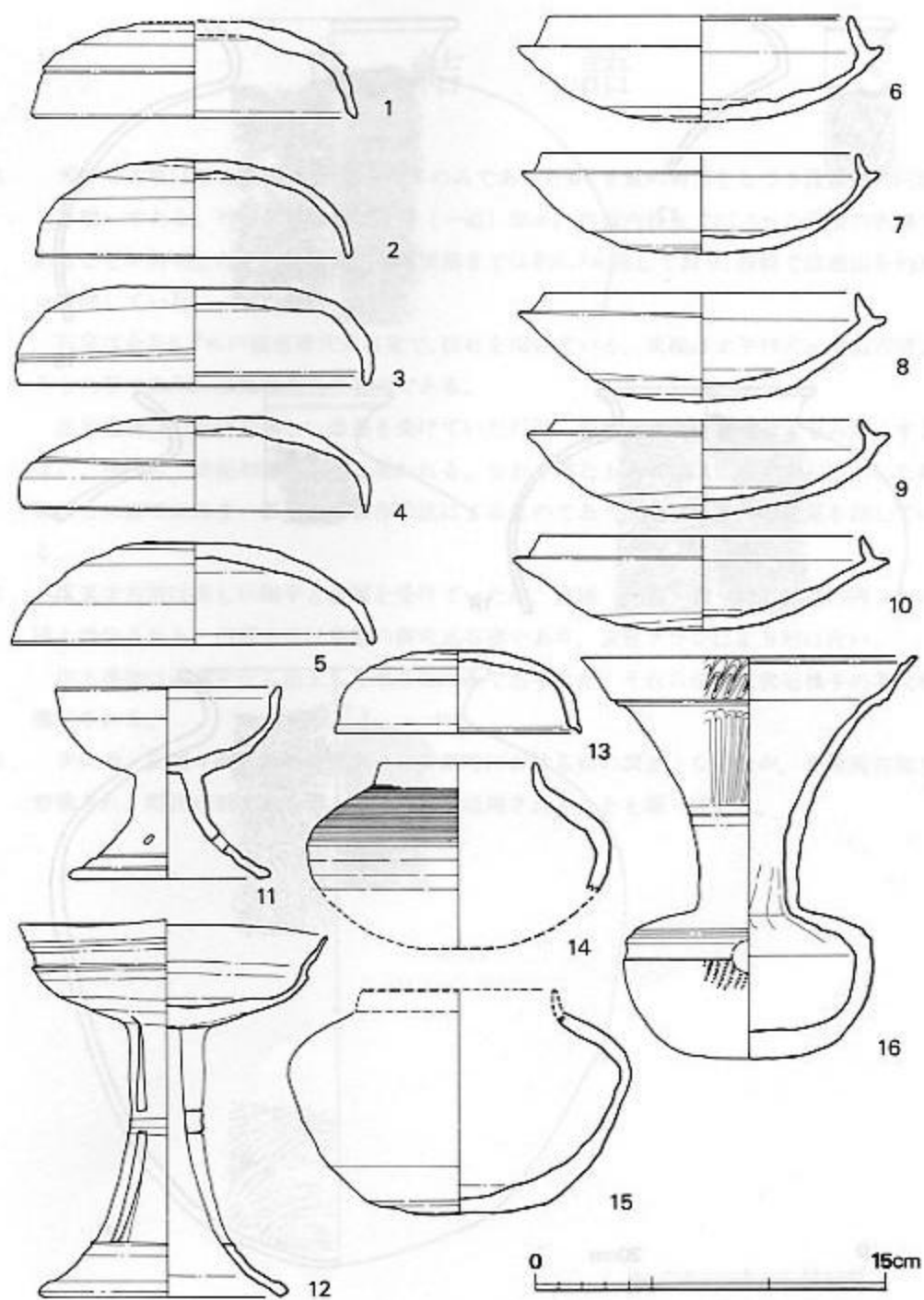
高杯（11・12） 短脚のもの（11）と長脚のもの（12）とがある。11は脚裾部に3個の小孔を穿っている。杯部は口縁部が直立し、端部はやや外反する。口径9.5cm・器高8.2cm。12は脚部に3個所の2段透しをもつ。脚及び杯部には細い凸帯が巡るが、その稜は鋭い。杯部の体部から口縁部にかけては極めて薄手の作りになっている。硬質で全体に整美な器形である。口径13.2cm、器高16.0cm。

埴（13～15） 埴蓋（13）は体下部が直立し、口縁部内面は有段である。へら削りは丁寧で、焼成も良好である。口径10.5cm・器高3.6cm。14の肩部はカキメ調整され、口縁部は短かく内傾する。15は肩がやや脹り、底部は平坦に近い。へら削りの手法は粗雑である。14の口径は6.7cm・最大胴部径は13.0cmである。15の最大胴部径は14.6cmである。

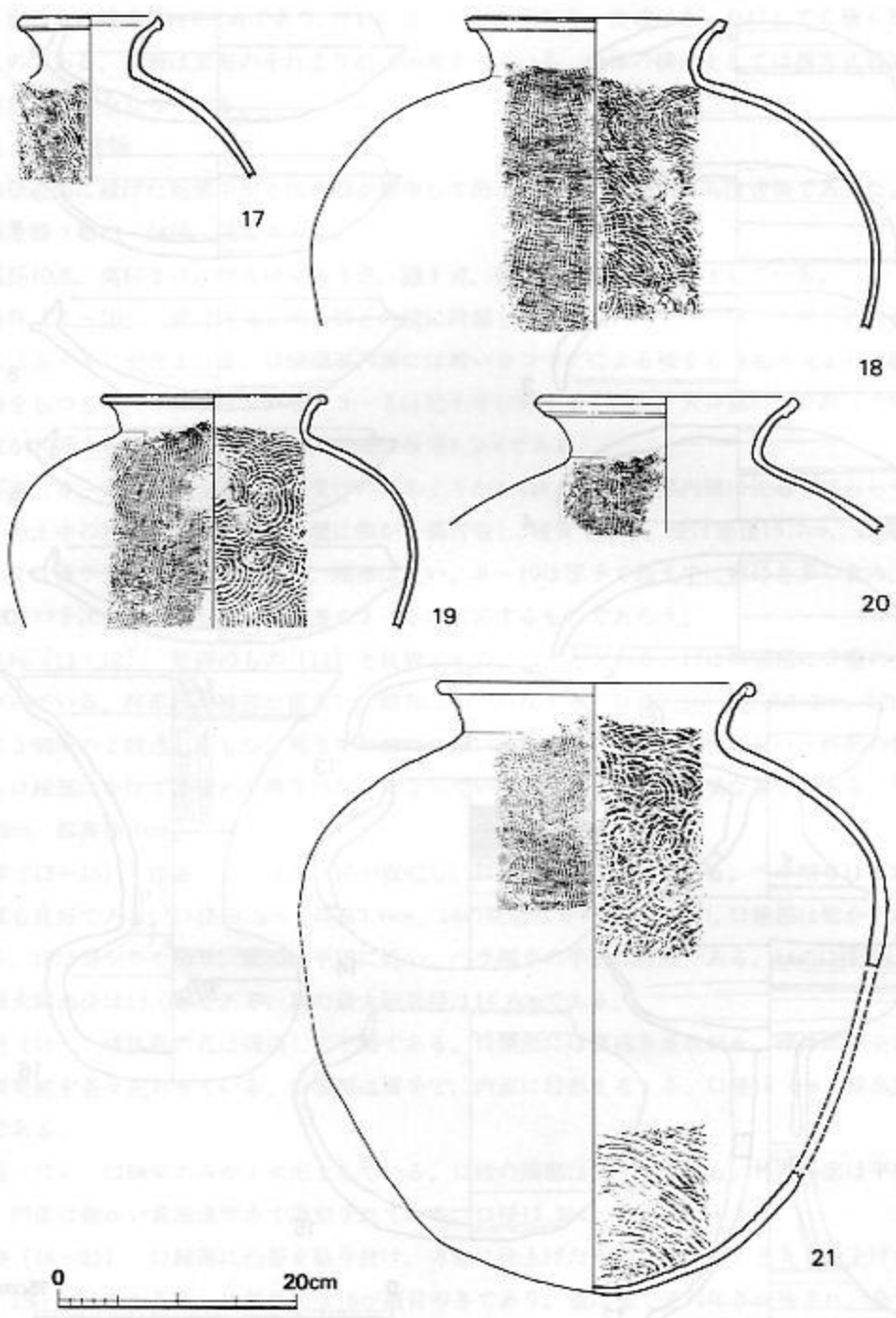
甕（16） 球体部の孔は破損して不明である。口頸部には櫛描き波状紋を、球体部中央には櫛刺突紋を各々巡らせている。口縁部は薄手で、内面に段部を有する。口径14.4cm・器高17.2cmである。

壺（17） 口縁部のみが1点出土している。口縁の端部は鋭く立ち上る。外部外面は平行叩き、内面は細かい青海波叩きで調整されている。口径11.2cm。

甕（18～21） 口縁部に凸帯を貼り付け、方形に仕上げたもの（18・20）と丸く仕上げたもの（19・21）とがある。体部外面は18が縄目叩きであり、他は全て平行叩きが施され、全てその後、部分的にカキメ調整されている。21のみが器高復元されうる。その器高は51.2・口径27.0cm・最大胴部径49.2cmである。



第14图 広運寺古墳出土須惠器実測図①(1/3)



第 15 図 広運寺古墳出土須恵器実測図② (1/6)

IV 結 語

1. 天仲寺古墳は墳丘全体の約1/8を残すのみであったが、2重の周溝をもつ3段築成の円墳（方墳）である。外濠の外縁まで直径（一辺）36m、内濠内縁まで22.5mの大型の古墳であることが判明した。石室床面から墳頂部までは約5.7m残しており、西側では地山を約3.6m掘削していた。

石室は全長9.7mの複室横穴式石室で、巨石を用いている。規模は大平村穴ヶ葉山古墳よりも大型であり、当地域最大のものである。

出土遺物は石室内が甚しい盗掘を受けていたため、前庭部から須恵器若干をみたにすぎない。年代は7世紀初頭～中葉と思われる。なお、墳丘上あるいは周溝中から出土した埴輪はこれまでにみない器型及び製作手法によるものであり、今後に類品の発見を期している。

2. 広運寺古墳は甚しい削平と盗掘を受けていたが、直径（一辺）12～13m程度の円（方）墳と推定される。内部主体は単室の横穴式石室であり、玄室プランは正方形に近い。

出土遺物は周溝中から出土した須恵器のみであったが、それらから6世紀後半の年代が推定される。

3. 天仲寺、広運寺両古墳の発掘調査は吉富町における初の調査となったが、今後両古墳が整備され、町民が郷土史を考える糧として活用されんことを願っている。

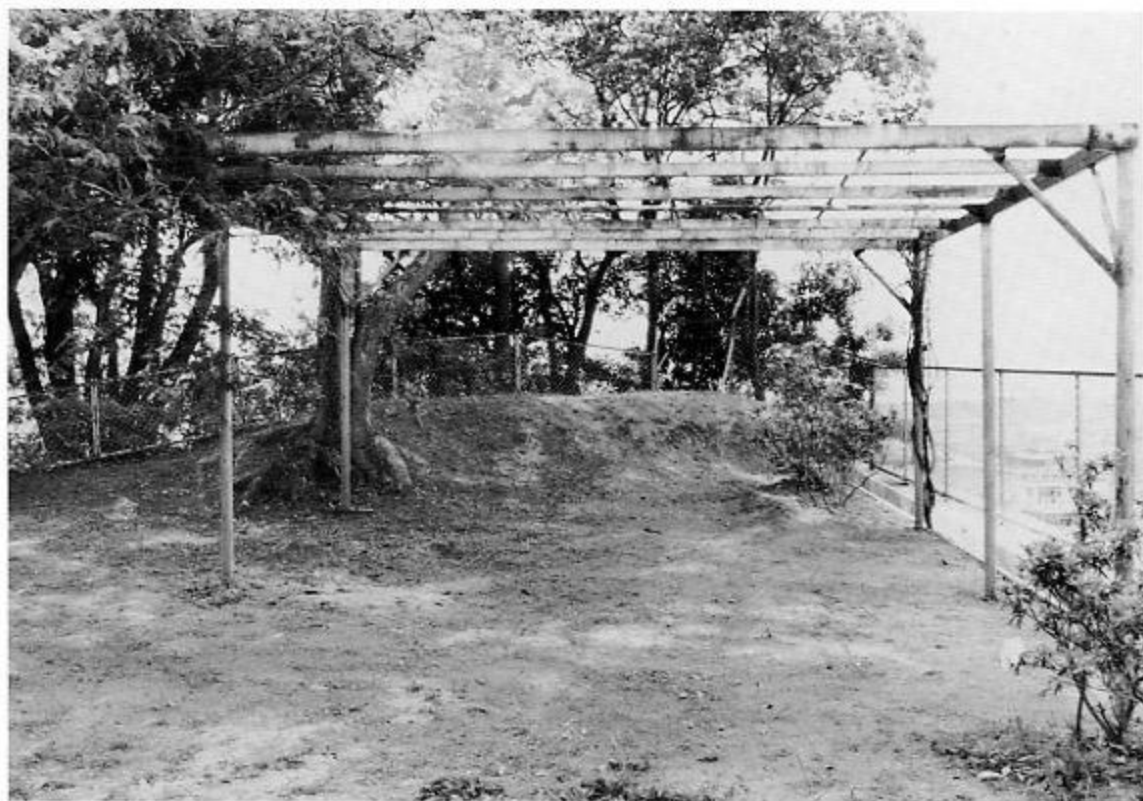
図 版



1) 天仲寺古墳遠景



2) 天仲寺古墳(右)と広運寺古墳(左)遠景



1) 天仲寺古墳々丘 (西より)



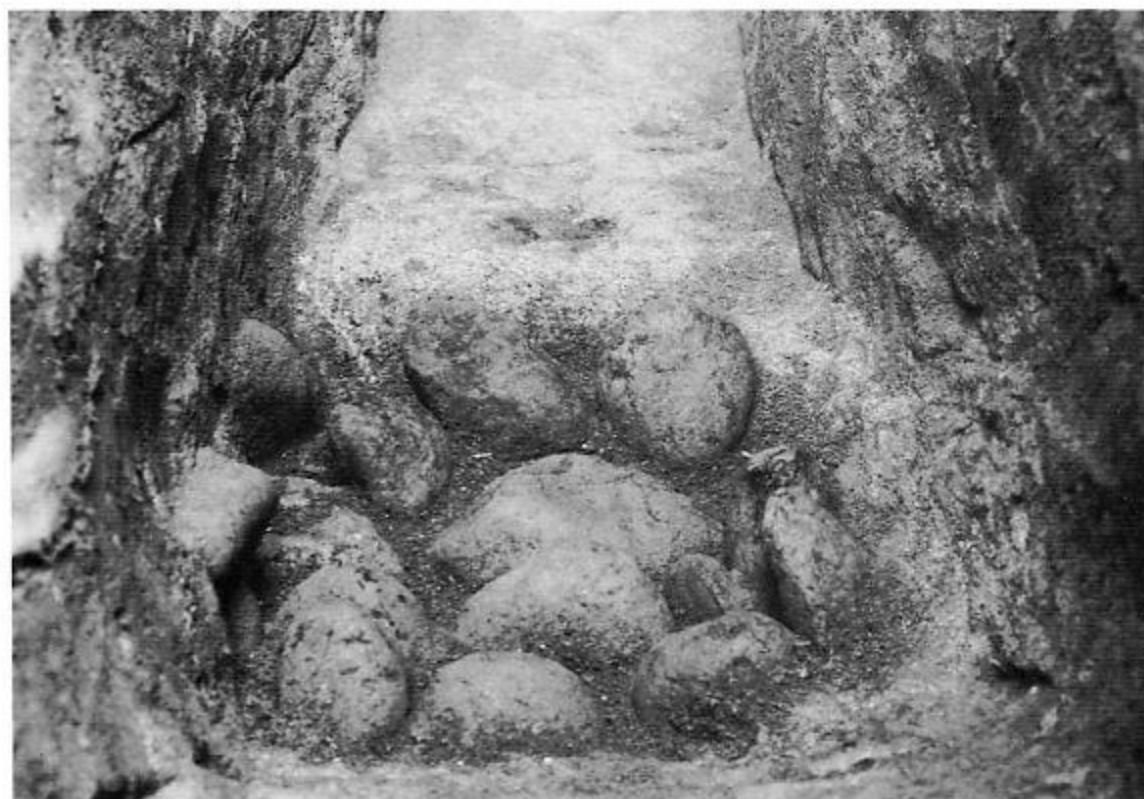
2) 天仲寺古墳々丘 (北より)



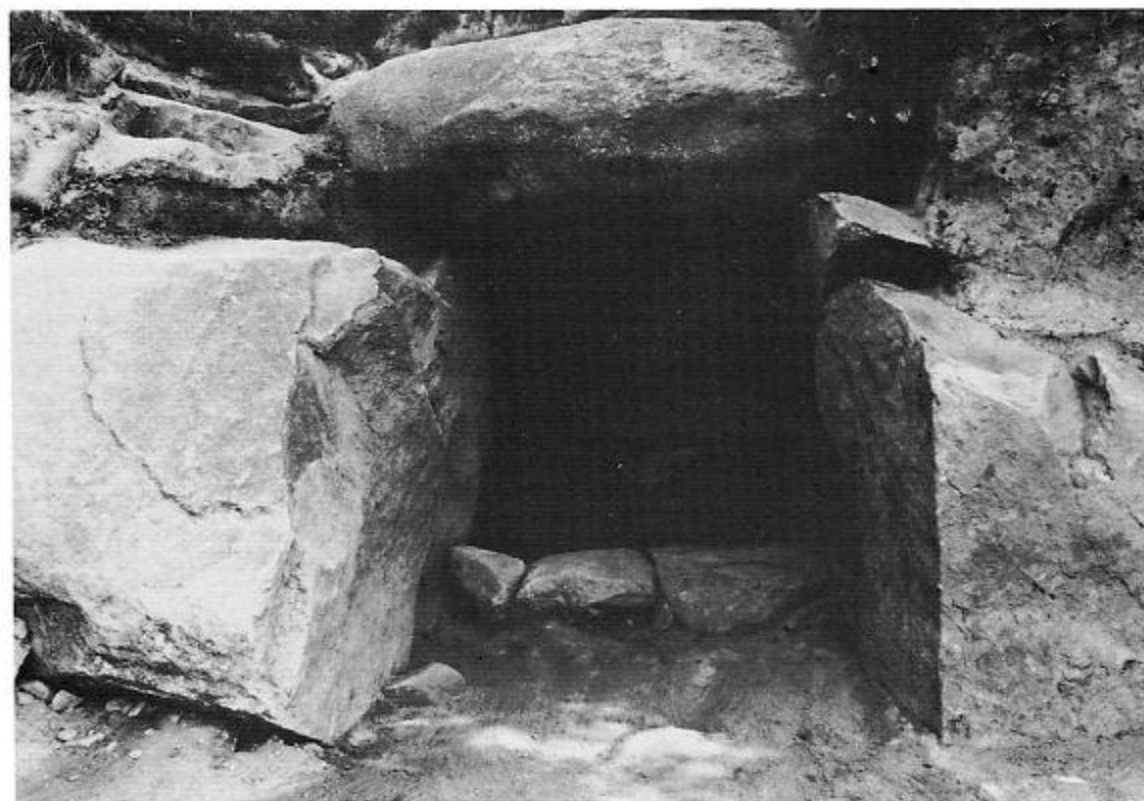
1) 天仲寺古墳第1トレンチ土層と天井石



2) 天仲寺古墳第3トレンチ土層と天井石



1) 第2トレンチ西端の外濠と石積み



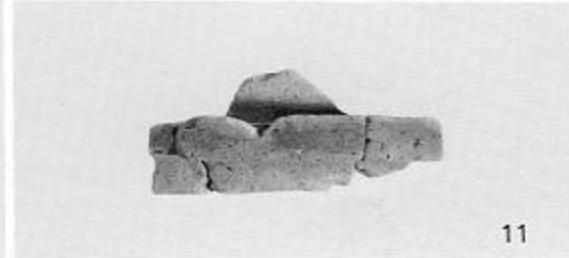
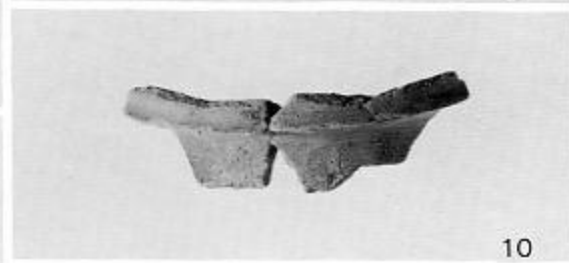
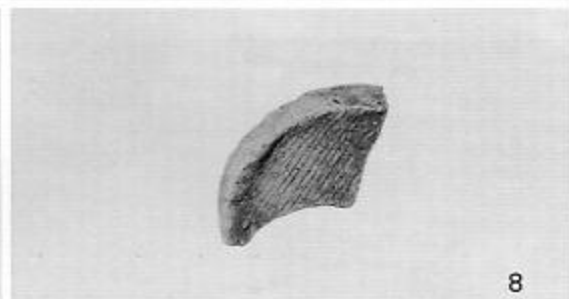
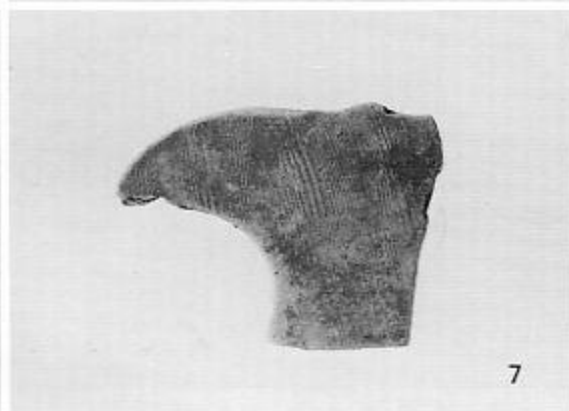
2) 天仲寺古墳石室（前庭部より）



1) 天仲寺古墳玄室奥壁



2) 天仲寺古墳玄室より前室・羨道部を臨む

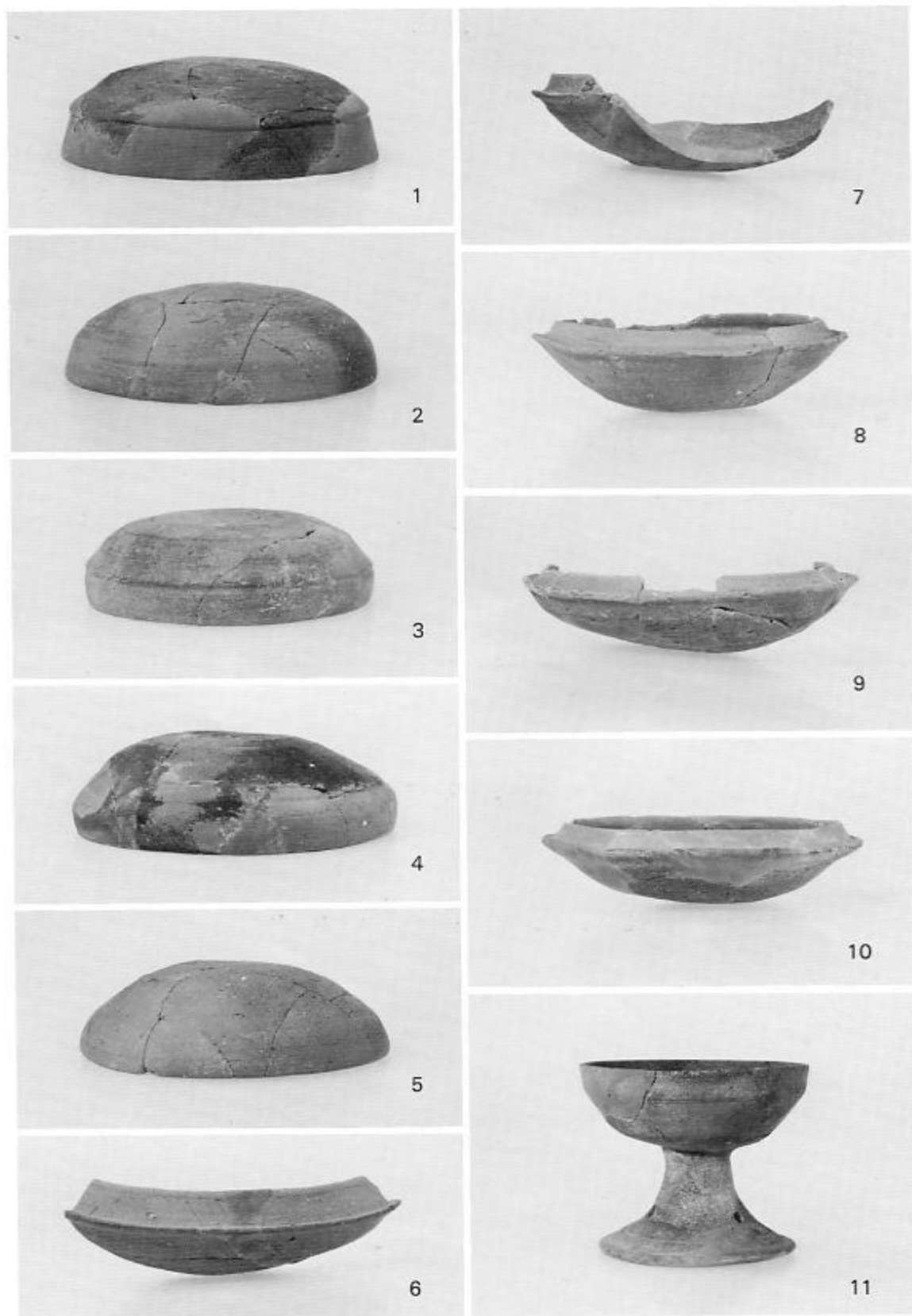




1) 広運寺古墳全景



2) 広運寺古墳石室全景



広運寺古墳出土須恵器①



天仲寺古墳・広運寺古墳

吉富町文化財調査報告書

第 1 集

昭和 58 年 3 月 31 日

発 行 吉富町教育委員会
福岡県築上郡吉富町大字広津413

印 刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号

